



主張

「これまでの部活動（部活動ガチャ）」から 「新たな学校部活動」へ

平井 邦明

部活動の「改革推進期間」に入り、各自自治体の「地域移行」に向けた取組はいかがでしょうか。多くの課題が指摘されている「地域移行」ですが、長きにわたって取り組まれてきた「部活動」も様々な問題点を抱えています。「学校教育の一環でありつつも教育課程外という位置付け」「教員には教科指導と部活動の指導が共に求められるという固定された考え」、更には「少子化に伴う維持の困難」という現代的な問題もあります。このような実情を考えれば、課題が多くても進めるべきは「地域移行」となります。

「新規採用として勤務することになった学校で、『〇〇部を頼むよ。』と言われて引き受けた。」「異動した学校で、『〇〇部の顧問が異動となったので、頼むよ。』と言われ、全く経験の無い部を指導することになった。」などの経験がある方も多いのではないのでしょうか。また、管理職にある現在でも、顧問になることを教員に依頼する際、「生徒のために」という「伝家の宝刀」を抜いている方もいると思います。しかしながら、このような経緯で顧問となった教員が、生徒に適切なアドバイスができない状況にストレスを抱えたり、生徒の力量を伸ばせないことにジレンマを感じたりするのは当然です。また、期待して入部した生徒にとっても精神的にマイナスであり、運動部であれば根柢の無い指導による故



障や怪我のリスクもあります。今の状況は、教員、生徒の双方にとって、「部活動ガチャ」という表現が最も当てはまると言えます。

「平日の部活動指導は勤務時間を越える。しかも、ボランティア。」「週休日の公式戦では引率。更に審判。」「生徒や保護者の期待から、『できません。』とは決して言えない辛さ。」など、全て「普通のこと」であり、「当たり前のこと」になっています。私たちの生活に根付いていること。これが「根付きすぎている」と「当たり前」になり、違和感に気付きにくくなるものです。また、仮に気付いたとしても、「当たり前」に反することはタブーとされる。正に「これまでの部活動」の運営状況を表しています。

「部活動」は、教員の献身的な姿勢（ボランティア）に支えられています。「部活動に燃える教員」がいる一方で、「専門外の指導を行わざるを得ない教員」「免許のある教科の指導に注力したい教員」「部活動の運営に疲れ果ててしまっている教員」も多くいます。全日本中学校長会の「令和四年度調査研究報告書」では、「最近五年間（程度）の部活動の課題」として、「部活動指導における教員の負担や顧問の決定」を選択した学校は八一・七%と最も多く、毎年度、同じ傾向にあります。このことから、全国の校長が「無理は承知だけど…」という気持ちでいることが分かります。その上で、「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン」に基づき、法令上の義務ではない「学校部活動」を設置・運営するのであれば、生徒だけでなく、教員のウェルビーイングの点からも、「これまでの部活動（部活動ガチャ）」を「新たな学校部活動」に変えることが必要です。「校長自身の覚悟」が求められる「改革推進期間」でもあります。

（全日本中学校長会顧問）